



Title	いつも笑顔だった井戸さんへ
Author(s)	河崎, 洋充
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

いつも笑顔だった井戸さんへ

河崎洋充

元西成市民館館長
NPO 法人サポーティブハウス連絡協議会事務局長
社会福祉法人 光徳寺善隣館中津学園

1999年当時、大阪府下には、2万人近い路上生活者（ホームレスの定義の一つ）がいました。それの人々を、何らかの方法で、救済できないかと、釜ヶ崎のまち再生フォーラム（事務局長ありむら潜氏）の場で、仲間の皆さんと話し合いを重ねていました。

私と簡易ホテル（一泊貸しのホテル）経営者の宮地泰子さんとで、今のNPO 法人サポーティブハウス連絡協議会（以下、サポ協）の前身を立ち上げたのは、2001年6月のことでした。

その頃、釜ヶ崎はフィリピンのマニラのスラムより、結核罹患率が、高いと言われていました。

大阪市保健局（当時）が、DOTS事業に本格的に取り組み始めたのもこのころです。その事業にサポ協が、協力していくことを運営委員会で決めました。今でも、毎年の活動目的の一つとして、DOTSに協力することを掲げています。

具体的には、「誕生月健診」と称して、毎月一回、誕生月のオジサンたちを会員の各館のスタッフが、引率して検診車（レントゲン車）まで連れて行くのです。これは、現在も続いている。

そこに、藤井寺保健所の診療放射線技師を定年退職された井戸さんが、NPO 法人「HESO」(HEALTH SUPPORT OSAKA) の事務局長として、釜ヶ崎デビューされたのです。サポーティブハウス連絡協議会はじめ、地域の支援団体を巻き込んで、釜ヶ崎から、結核罹患者を撲滅させる、あるいは激減させるという大きな目標を掲げて、活動を開始されました。前述のレントゲン検診車の運行計画と情報宣伝をして、受診者数を増やすことでした。これに、サポ協の誕生月健診を連動させて結核予防体制の枠組みを作りあげていったのです。

5、6年経った頃でしょうか、井戸さんが釜ヶ崎の「HESO」を離れられて、天満橋と谷町4丁目の間にある大阪府の外郭団体である「大阪公衆衛生協会」の事務局長として、第3の人生をスタートされたのは。

その頃、私は大阪法務局の人権擁護委員を委嘱されていました。三ヶ月に一度、法務局に行って電話で相談を受けるのです。

大阪公衆衛生協会の入るビルは、法務局への途中にありました。帰りに井戸さんの新しい職場に寄って、ドアを開けると井戸さんの嬉しそうなお顔とお声を今も思い出します。人懐っこい柔軟な表情が、忘れられません。お茶を頂きながら、釜ヶ崎の話、結核の話とアツという間に30分はすぐに経ちました。

2年間ぐらいそういうことが続けていました。が、突然、大阪公衆衛生協会が、閉鎖になり井戸さんとお会いすることが、出来なくなりました。そこへ、今回の訃報です。悲しみがまた、去来しました。ご冥福をお祈り申し上げます。　　合掌